

# のどの異常感を訴える疾患に対する可視総合光線療法

一般財団法人光線研究所所長  
医学博士 黒田一明

## ■ 咽喉頭異常感症

「のど」のことを医学的には咽喉頭と呼びます。この咽喉頭に「イガイガ感がある」、「何か異物がある感じ」、「詰まった感じがする」、「飲み込みにくい」などの異常な感じを訴えることがあります。咽喉頭の異常感があるにもかかわらず、原因が不明なものを真性、原因が明らかなものを症候性といい、一般的に両者を併せ咽喉頭異常感症と言います。咽喉頭異常感で耳鼻咽喉科や内科を受診する患者は多く、また、その原因となる疾患は全身、局所を合わせて極めて多彩です。症候性咽喉頭異常感症の原因疾患は図のように局所的、全身的、精神的の3つに大きく分けられます。

のどの異常感は従来は風邪の後や副鼻腔炎などの慢性炎症が主な原因でしたが、近年は鼻アレルギーや胃酸の逆流症が原因として増加しています。一方、咽喉頭異常感症は、原因が何であれ程度の差はありますが、心因の関与があり、本症の増加は現代社会におけるストレス増加が関与していると考えられます。また、中高年の本症患者はガン好発年齢でもあり、のどの異常感の存在は、ガンの不安につながることも本症の背景にあると思われれます。

今回は咽喉頭異常感症の原因として注目されている胃食道逆流症の文献と治療例について解説します。

## ■ 胃食道逆流症とのどの異常感（日本の研究、2006年）

咽喉頭異常感症と胃食道逆流症の関わりを本邦では1995年に報告されたが、欧米では古くから認知されていた。胃食道逆流による耳鼻咽喉科領域の病態は咽頭の炎症にとどまらないので咽喉頭逆流症と総称されている。本症患者では咳ばらい、煩わしい咳の咳症状が74.1%、声がれ、声が出しにくい感じの音声症状が76.5%、胸やけ、酸がのどまで上がってくる感じの食道症状が58.8%にみられた。

## ■ 咽喉頭異常感症と骨量低下の関連（日本の研究、2000年）

咽喉頭異常感症がなぜ生じるか未だ定説がない。本症の原因を探ることを目的として、本症が中高年女性に多いことに注目し、同様に骨粗鬆症が中高年女性に多く見られることから骨量低下と本症に因果関係がないかを検討した。本症患者（閉経前の女性と60歳未満の男性）並びに対照群を対象に、中手骨の骨量を測定し比較検討した。その結果、本症患者では女性、男性とも対照群に比べ骨量低下が判明した。本症は骨量低下との関連が示唆されたが、他の文献では血中カルシウム濃度と食道括約筋の動態との関連が指摘されていることから、本症の機序には一部カルシウム不足が食道の動きに影響し、のどの異常感を発生させている可能性がある。

## ■ 胃食道逆流症と耳鼻咽喉科疾患—中耳にまで達する十二指腸液の逆流—（日本の研究、2011年）

小児、成人とも慢性副鼻腔炎患者には胃食道逆流が認められる。酸の直接傷害や迷走神経反射を介した機序が示唆されている。小児、成人とも中耳炎や慢性の耳管機能障害のある患者では胃食道逆流の頻度が高い。難治性中耳炎患者では高濃度のビリルビン、胆汁酸が貯留液中に検出され、十二指腸液まで検出されることもある。

## ■ 可視総合光線療法

咽喉頭異常感症の患者は、原因が何であっても心身の疲労によってエネルギー不足になり、体が冷えて粘膜の抵抗力や免疫機能など自然回復力が低下し、のどの異常が出やすくなります。本症患者の背景には、前記したようにビタミンDやカルシウム不足からカルシウム代謝が異常になり、骨粗鬆症などの生活習慣病に罹患しやすくなっていることが考えられます。その結果免疫や粘膜の機能が弱くなり、さらに食道の筋肉やのど周辺の筋肉の機能が低下して種々ののどの異常感がでやすくなります。長引く症状は、患者の不安を増し精神的な負担も加わり生活の質を低下させることとなります。

可視総合光線療法は、光と熱のエネルギー補給で体を温めて血行状態の改善や細胞の新陳代謝を良好にして粘膜の抵抗力や免疫力を高めます。さらに光線照射はビタミンD産生を促してビタミンDやカルシウム不足を是正することで全身のカルシウム代謝が良好になり、食道の筋肉やのど周辺の筋肉の機能をよくしてのどの異常感の症状改善になります。光線照射は不安定な自律神経系機能を安定させる作用もあり、睡眠が良好になることから本症患者の精神的安定に寄与します。

◆**治療用カーボン**：治療例1の喉頭ガンは1000-5000番、1000-4008番を、治療例2の胃食道逆流症は3001-5000番、3001-4008番を、治療例3の甲状腺のう胞は1000-3001番、1000-4001番、1000-4008番を使用。

### ◆ 今回症例の一般的照射部位

- **喉頭ガン**は、両足裏部⑦、両足首部①、両膝部②各5～10分間、腹部⑤、腰部⑥各5分間、咽喉部④各5～10分間照射。口中⑧は5～10分間照射を適宜追加。
- **胃食道逆流症**は、⑦②各5～10分間、⑤⑥④各5分間、背正中部③10分間。上腹部⑩、肩胛骨間部⑫、胸骨部⑪は各5～10分間照射を適宜追加。
- **甲状腺のう胞**は、②各5～10分間、④各10分間照射、体の冷えがあれば①⑤⑥各5分間を適宜追加、肩、首のこりがあれば後頭部③あるいは頸椎下部32各5～10分間照射を適宜追加。
- **明らかな原因疾患がない場合は**、3001-5000番または3002-5000番を使い、⑦②各10分間、⑤⑥③各5分間、④各5～10分間照射。  
その他表のような、のどの異常感を訴える疾患には可視総合光線療法『遺伝と光線』、『理論と治療』を参考に治療する。

## ■ 治療例 1

声がれ (喉頭ガン)                      64歳 男性 市役所職員

- ◆ **症状の経過**：60歳頃から声がかれるようになった。カラオケ好きで声の出し過ぎとと思っていたが良くならないので61歳時、耳鼻科で診察を受けたところ声帯ポリープがあったが悪性所見はなく経過観察となった。とくに治療がなく何もすることもなく不安な時、友人より光線治療の話聞き治療を希望して当附属診療所を受診した。
- ◆ **光線治療**：治療用カーボン1000-4008番を使用し、⑦10分間、②⑥各5分間、④各10分間、⑧10分間照射。
- ◆ **治療の経過**：自宅で週3～4回治療した。治療2カ月後、声のかすれが少し良くなった感じがありカラオケが結構うまく歌えた。治療3カ月後、定期検査の生検で声帯の一部が硬くなっていて悪性の所見で喉頭ガンと診断され放射線治療を受けた。光線治療のおかげか放射線治療の副作用はなかった。その後も光線治療を続け治療半年位で声がれは解消した。治療3年後の現在、声がれはなく、ガンの再発もなく経過はよい。

## ■ 治療例 2

のどの違和感、呑酸 (逆流性食道炎)                      69歳 女性 主婦

- ◆ **症状の経過**：65歳頃から胸やけ、呑酸 (胃液がのどに逆流) の症状があった。とくに食べ過ぎた時に症状が強く、いつものどに違和感があった。病院の検査で食道裂孔ヘルニア、逆流性食道炎

と診断され投薬を受けていたが改善せず、足の冷え、便秘もあったので68歳時友人の紹介で当附属診療所を受診した。

- ◆**光線治療**：治療用カーボン3001-4008番を使用し、⑦①各10分間、②⑥・左右下腹部③④・⑧各5分間、④の正面5分間照射。
- ◆**治療の経過**：自宅で毎日治療し、1カ月後、足が温まり、下剤服用していても十分な排便感がなかった便秘が少し改善した。治療2カ月後、胸やけ、呑酸の症状が出ない日が多くなった。また冷えていた腹部も温かくなり、ガスがよく出るようになり便秘がさらに良好となった。治療3カ月後、胸やけ、呑酸の症状はさらに改善し、のどの違和感も減った。治療4カ月後、足、腹部の冷えはなくなり、逆流性食道炎の症状は少なくなった。治療1年後の現在、のどの異常感はなく、食べ過ぎに注意して光線治療を続けている。

### ■ 治療例 3

のどの通りが悪い（甲状腺のう胞） 24歳 女性 会社員

- ◆**症状の経過**：大学卒業して22歳で会社勤めをするようになってからののどの痛みや腫れ、食事の通りが悪いことがあった。また、首を動かすににくいことがあった。病院で検査を受けて甲状腺のう胞と診断された。悪性の所見はないが、のう胞が3.3cmと大きいので手術を勧められた。手術はしたくなくて義母に相談したところ光線治療を試すように言われ当診療所を受診した。
- ◆**光線治療**：治療用カーボン3000-3001番を使用し、⑦②各10分間、③5分間、④右5分間、左20分間照射。
- ◆**治療の経過**：義母から治療器を借り自宅で毎日治療した。体の冷えの自覚はなかったが光線照射で体が温まり、治療1カ月前後でのう胞は縮小し、のどの痛みや腫れは楽になり、食事の通りもよくなった。また、首や肩の凝り、首の動きは改善した。その後も光線照射でのう胞は縮小し、治療4カ月後、甲状腺のう胞は消え完治し、担当医はびっくりしていた。本人は体の冷えが甲状腺など体調に大きく影響することが光線治療によって理解できたと話していた。



#### 【その他の治療例について】

### ■ 後鼻漏（副鼻腔炎） 65歳 女性 主婦

54歳時、耳鼻科で副鼻腔炎、後鼻漏と診断。後鼻漏のためにのどに痰がからむ症状が出ると言われ手術を勧められた。手術はしたくないので光線治療を始めた。治療用カーボン3001-4008番を使用し、⑦②⑧各10分間、②⑤⑥③④、鼻部⑩各5分間照射。自宅治療を続け、後鼻漏によるのどに痰がからむ症状は治療1年後にはほぼ気にならなくなった。65歳の現在、体調は良好である。

### ■ 声帯ポリープ 75歳 女性 主婦

50歳頃から声のかすれあり。60歳時、冷え症や自律神経失調症のため、自宅で3002-5000番を使用し光線治療を始めた。63歳時、風邪の後、痰がからみ声のかすれが悪化し耳鼻科で声帯ポリープと診断、切除の必要はなかった。当所を受診し、治療用カーボン3002-4008番を使用し、⑦②④各10分間、⑧5分間照射（①⑤⑥③は適宜追加）。自宅治療を続け半年後、声帯ポリープは縮小し、声のかすれは改善し高い声が出た。治療10カ月後、声のかすれはなく、検査の結果、声帯ポリープは消失していた。75歳の現在、再発はなく元気である。